



Title	Instrumental Activities of Daily Livings (IADL) and Depression in Community-Dwelling People Aged 60 Years or Older in Kandy District, Sri Lanka : With Special Reference to Ethnicity [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Khaltar, Amartuvshin
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第12572号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66107
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Note	配架番号 : 2313
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Khaltar_Amartuvshin_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（医学） 氏名 ハルタル アマルトゥブシン

主査 教授 西浦 博
審査担当者 副査 教授 荒戸 照世
副査 教授 玉腰 暁子
副査 教授 大滝 純司

学位論文題名

Instrumental Activities of Daily Livings (IADL) and Depression in Community-Dwelling People
Aged 60 Years or Older in Kandy District, Sri Lanka
- With Special Reference to Ethnicity -
(スリランカ・キャンディ地区の地域高齢者における手段的日常生活動作とうつ
—民族性の視点から—)

アジア地域における高齢化が加速しており、一部の国では日本を凌ぐ勢いで高齢社会に変化しようとしている。平均寿命の高齢化と出生率の低下に応じて人口構造に留まらず疾病構造に大きな変化が生じており、うつ病の世界的な増大はその代表の1つである。また、健康寿命の延伸は重要な課題であるが、その中で日常生活動作を維持することは鍵となる事項であり、特に歩行器具などを含む手段的日常生活動作 (IADL) の有無は健康に独立性を維持して高齢化しているか否かを決定する重要な要因である。本研究は、スリランカの中でも多民族性が保たれているキャンディ地区を対象にした横断的疫学研究であり、特に、仏教・ヒンズー教・イスラム教の信徒が明確に民族として区別可能な設定の下で、民族とうつ病及び民族と IADL との関係を中心に明らかにすべく実施したものである。

研究では恣意的にサンプリングされた 778 人の 60 歳以上の住民を対象に、IADL の使用者割合とうつ病患者割合をアウトカムとして、その決定要因を検討した。分析には民族とその他の変数の交互作用項を含む多変量ロジスティック回帰分析を実施した。Sinhalese の間で IADL やうつ病の割合が他と比較して低く、貧しい Tamils において IADL 割合が高いことが示唆された。うつ病の割合は 31.8% であり、Sinhalese は 27.3%、Tamil は 42.1%、Muslim は 32.9% であった。経済的不安定、社会的サポートの必要性および 2 つ以上の基礎疾患を有する者の間でうつ病の者が多い傾向が判明した。この研究は、特定のコミュニティに着目し、高齢者の IADL およびうつ病罹患に関連して民族性とその他の要因が影響することを示した最初の横断的研究報告である。

学位論文内容の口頭発表後、副査の大滝純司教授より、調査対象のコミュニティの選定理由と他地域との差異に関する質問があった。申請者は、**Tamil** の数が十分かつ民族の混合性が十分であるためと回答した。主査の西浦博教授からは、統計学的検討として民族の層構造に着目するならばマルチレベル分析が妥当なのではないかという指摘があった。これに対して申請者は、民族別のサブグループ解析を実施しており、さらに、マルチレベル解析も実施していることに関して追加分析の結果を交えて説明した。続けて、西浦博教授からアウトカム変数の民族間の変動に関してサマリー統計の記述や信頼区間の計算が必要ではないかと指摘があり、申請者はその記述箇所と統計学的検討方法について回答した。

続いて、副査の玉腰暁子教授から、サンプル集団の選択について説明が不足しており、それが研究の結果に与えた影響はないのかと質問があった。これに対して申請者は、調査集落のレジデントリストを基にサンプリングしており、それに基づいて可能な限りにインタビューした結果が現在の観察データとなったことを説明し、全体を代表できているか否かについて考察を施すことが必要と理解している旨を返答した。副査の荒戸照世教授から、先行研究と今回の研究の違いについて明確に説明するよう質問があった。申請者は、従来の研究では **non-Sinhalese** が1つのグループとして取り扱われており、そのグループの中で本研究は **Tamil** の際立って貧しい集団に **IADL** の割合が高いことを特定したことを主張した。また、これまでは **Sinhalese** で実施されてきた調査手法について3つの言語を利用して奮闘した点も異なる点について指摘した。

疫学研究および統計学的分析の詳細内容に関する質問が多い中、申請者はその主旨を的確に理解し、スリランカでの研究や類似の民族研究に関する文献的見解を混じえて適切に回答した。

この論文は、民族および社会経済的要因が **IADL** およびうつ病に与える影響に関して疫学的検討を施した。特に、スリランカのキャンディ地区におけるフィールド横断調査を通じて概ね適切な方法論に基づいて解析した点は高く評価され、高齢社会における民族的な不平等を明確に示し、今後の健康寿命の延伸政策を構築する上で基礎資料として貢献することが期待される。

審査委員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を授与されるのに十分な資格を有すると判定した。